第二部

1　漢字の成り立ち

第一部では、「鬼に金棒」の鬼のからだをつくる方法を考えてきました。こんどは、金棒の番です。それは、「体系的」に漢字を学ぶ、ということです。

いままでは、漢字をばらばらに覚えていきましたので、覚えるのにほねがおれ、覚えたものはわすれやすい欠点がありました。しかし、この学び方では、いっぺんにたくさんの漢字が覚えられ、覚えた漢字はわすれることがありません。これからの漢字の学習は、どうしてもこれでなければなりません。

漢字を体系的に学ぶためには、まず、漢字の成り立ちを知っておく必要があります。

(1)知らない字でもピタリと当たる……象形文字

漢字の基本となる象形文字

どこの国でも、文字のはじめは、かならず「絵文字」で始まっています。物の形を象(かたど)った字という意味で、ふつう、「象形文字」といわれています。

漢字でも、古くつくられた文字は、すべて象形文字です。字数はそんなに多くありませんが、これが組み合わされて、複雑な文字がたくさんつくられていますので、しっかり覚えておく必要があります。漢字を学ぶうえで、もっとも基本的なことなのです。

幸いにも、もとが絵からできた字ですから、知らない字でも、注意してみれば、しぜんと意味がわかってくるほどで、たいへん覚えやすいものです。

漢字を絵と結びつけて覚える

これらの漢字が、なにを表しているかは、字を知らない子どもでも、絵と対照することでわかるはずです。たとえば、山が の絵に似ていることに気づいたら、山が「やま」と読む字であることを教えてやるのです。

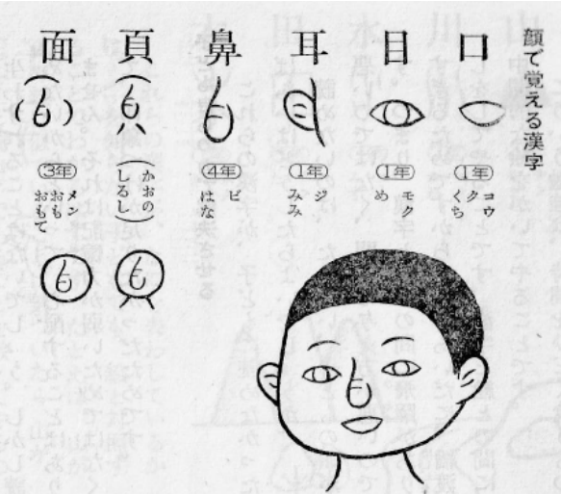
つぎのきかいに(それ

は、その日のうちでも、数日後でもよい)、教えた字が読めるかどうか、尋ねてみます。数日後にまた尋ねてみて答えられるようでしたら、もう、一生わすれることはないでしょう。しかし読めないからといって、心配することはありません。それは記憶力が弱いためではなくて、印象付けが足りなかったためです。

子供自らの力で解決させる

これらの漢字が、子どもに読めなかったばあいはどうしたらいいでしょうか。

読めないのは、たいてい、子どもの頭が悪いのではなく、問題の与え方が悪いのです。つまり、漢字と絵の間に飛躍(ひやく)がありすぎるためですから、そのあいだに、橋渡(はしわた)しをしてやることです。漢字と絵との間に中間的な絵をかいてやることです。



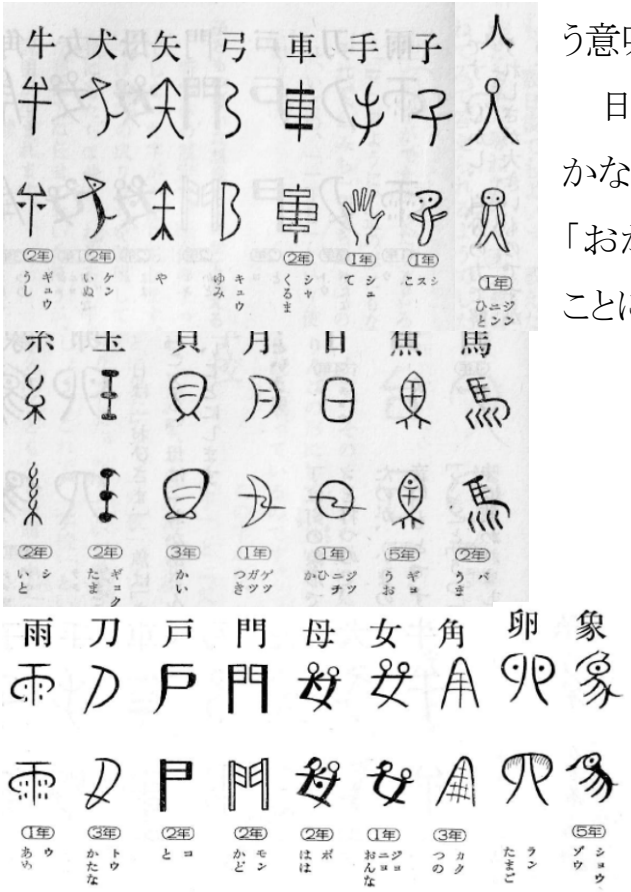
こういう勉強は、時間をひどく食うものです。しかし、自分の力で解決したものはうれしさが大きいものですから、けっしてわすれることがありません。けっきょくは、時間的にも経済だということになります。

自 三年 ジ シ みずから

これが鼻の象形です。自分をさすのに、鼻に手を当てるので、「じぶん」という意味に使われ、実際の鼻には鼻という読みを表す字を加えて、これを区別するようになったのです。

厶 シ わたくし

これも鼻の象形です。自が、しわのよっている鼻で、これは若い人の鼻です。これは、「わたくし」という意味に使われます。



日は「おひさま」、魚は「さかな」、子は「こども」、母は「おかあさん」と読んでよいことにします。

丁という字

丁 四年 テイ チョウ

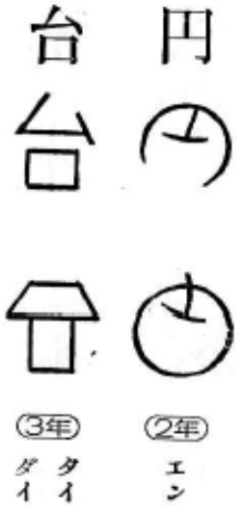
釘 テイ くぎ

打 四年 ダ うつ

丁は釘の象形で、チョンションと打つので、チョンといったのが、いまのチョウという音のもとです。この字は、「くぎ」と「うつ」と、二つの意味に使われましたので、丁+金から「くぎ」、丁+手から「うつ」という二つの字ができました。ところが、丁は、「 」のように、道の形にもなりますね。それで、「みち」「みちのり」の意味に使われ、いまの、「一丁目」という使い方が生まれました。

子どもの豊かな想像力に任せて教える

新体字の制定で、字体のすっかり変わってしまった字がかなりあります。こういう字は漢字の成り立ちを説明しても、なんの役にもたちません。むしろ、子どもの自由な想像力に任せておいたほうが、みごとな説明が生まれます。



左の例(れい)は、その一例です。台はそのまま台の形に見立て、円は、りんごの形にして、丸(まる)い意味をその字形から読み取っているのです。

(館長注記:新体字制定と共に活字も対応していましたが、最近のIT技術者の努力で、本来の文字がフォントになっています。台は臺、円は圓です。)

学校

この字から、子どもたちは「子」と「父」とを見いだし、これを、「自分たち生徒」と、「先生」とに見たてて、「がっこう」という意味をくみとりました。なんという豊かな想像力でしょう。これで、「学校」という文字は、永久に子どもたちの頭の中に生き生きと生き続けることでしょう。